

第5回東海村“自分ごと化”会議 議事概要

参加者	会議参加者 15名
コーディネーター	伊藤伸（一般社団法人 構想日本 総括ディレクター）

■第5回“自分ごと化”会議の進め方等の説明

会議進行と提案書（案）に関する説明（構想日本 伊藤）

- これまでの議論と改善提案シートに記入していただいた内容をもとに提案書（案）を作成した。4回目までは「課題」があり、それに対して「どう改善するか」という形でとりまとめていたが、提案書は「こうしていこう」という書き方に変えている。
- 提案書は、提案を具体的に実現するにあたって、「村の行政がやらなければならないこと」だけでなく、「自分たちに何ができるか」、「地域で何ができるか」ということも記載している。
- 提案書に対する変更・削除や追加提案のご意見を「意見提出シート」に書いていただくとともに、発言いただく。会議終了後、その内容を取りまとめて提案書を修正する。提案書に反映させたものを後日郵送し、そこで提案書の完成としたい。
- 提案内容は大きく6つに構成している。この6つの提案に対して、感じたことを自由に発言いただき、本日の議論を進めたい。
 - 提案1：原子力や原発に関してできるだけ正確な情報を整理し共有する。行政や事業者と住民との情報のギャップを埋める。
 - 提案2：東海第二発電所（以下「東海第二」）の安全性を強化する。安全性向上対策工事のプロセスやそれでも残るリスクについて、住民に丁寧に説明する。
 - 提案3：安全に避難できるよう、避難ルートをはじめとした避難計画を整備する。
 - 提案4：原子力事業所が多いことや原発立地による交付金など、東海村のいまの特徴や現状の魅力を知る・伝える。
 - 提案5：原発に代わる新たな東海村の魅力を創り出す（交付金が減ることを想定したまちづくり）。
 - 提案6：原発に賛成、反対、どちらでもない人など多様な人が参加して、建設的な議論を行う場を多くつくる。

■提案1（正確な情報共有により情報のギャップを埋める）

行政・原子力事業者と住民の双方向コミュニケーション

- 村から村民への一方通行ではなくて、村民の意見を村が聞けるような、双方向のやり取りができると良い。
- 情報のギャップを埋めるためには、お互いを知ることが重要だ。ネットだけでなくリアルでも、原子力事業者と住民が双方向で対話できる機会をもっと増やすと良いと思う。

自分ごと化会議をWEB配信して見る機会を増やす

- 自分ごと化会議にオンライン参加したとき、オンラインで会議を見てもらうのも良いのではないかと思った。個人情報の取り扱いなど課題はあるが、ログインできる人を限定するなど手段はあると思う。
- 閲覧者へのログイン制限は重要だ。発言の一部分を悪く切り取られるのは、参加している私たちにとって一番のリスクになる。
- WEB中継・配信には、会場の回線等インフラの強化が必要だ。

興味・関心を持ってもらう

- 東海村は、SNS、広報紙、HP等で情報発信をしているが、村民が関心を持たないと意味がない。情報を受け取ろうとするきっかけづくりが必要。
- 議論してきたことを周りと共有していくための、何か具体的な方法を考え実行していないと、もともと関心が高い人や自分ごと化会議の参加者・傍聴者にしか広がらない。

伊藤：他市町村の事例で、自分ごと化会議終了後に提案書の概要をつくり、家族や大学のクラスの人たちに説明した方がいた。それによって周囲に関心が広がったケースがある。

- 子どもたちから、どんな東海村にしたいか、どんな村に住んでいきたいかの声を集め、それに対し、大人がどのようにアプローチしていけばいいのかを考える。こうしたアプローチの仕方なら、関心を呼ぶ効果があるのではないか。
- 参加者として自分は関心があるが、家族には関心がない。興味がない相手に正攻法で話すのは難しい。行政も原子力事業者も攻法の情報発信をやっているが、もっと興味を持ってもらうためには、炎上する覚悟でバズらせる必要もあるのではないか。
- 「バズらせる」という話があったが、クーポンや給付金などの生活に身近な話題になると全国的な議論になる。その中で思い切ったことをやるという動きも、村内ですると良い。
- 興味がある人へのメルマガ配信はどうか。登録するとイベントスケジュールなどを受け取れることは、たとえ一方通行でも、関心のある方にとっては良い仕組みだと思う。

- 必要な情報がホームページにあり、知りたいときに調べて見られるよう、事前にどこに情報があるかアナウンスしておけば良い。必要な情報はアナウンスできていると思うので、少しでも興味を持ってもらえるよう、入口となる部分に注力していけばいい。

■提案2（東海第二の安全性強化と、リスクの丁寧な説明）

原発の安全性向上対策工事

- 工事のプロセスや、それでも残るリスクの住民説明は、専門的で難しい話になるだろう。
- 安全性向上対策工事は住民にはできなくても、事業者の取り組みを監視することができる。そのためにも知識が必要だ。
- 現場に行き、安全性向上対策工事の状況を見ながら直接説明を聞くと、内容をより実感することができた。できるだけ多くの人に直接見てもらえた方が、工事の内容を納得できると思う。

伊藤：申し込みをすれば、誰でも東海第二の見学は可能か。

川又：一般の方が自由に見学することは難しい。5月の見学会のときは、村が事業者と調整し、政府や自治体向けの見学ルートを案内していただいた。

原発の安全性とリスクに関する情報発信

- 東海村のLINE公式アカウントや、アプリ「こちら東海村」の利用者が周囲で増えてきている。こうした手段をつかって、原発・原子力関係の情報を事業者に任せきりにせず、行政からも発信してはどうか。

伊藤：原発に関する情報の責任主体が原電だということもあってのことと思うが、行政の意見を聞きたい。

川又：やり方の工夫と慎重な検討が必要だ。原子力に関する村からの情報発信については、現状、トラブル発生が多く、村から明るいニュースを流したことはあまりない。

- 国が定めている安全基準に対し、東海村の進捗率が何%か、どういう現状なのかという情報を発信したら、明るいニュース・ポジティブな情報発信と言えるのではないか。

衛星写真のセキュリティリスク

- 伊藤：安全性について、第4回の会議で、「東海第二を衛星写真で詳細に見ることができ、セキュリティに不安がある。」という意見があった。ほかの原発を含め確認したところ、福島や松江は衛星写真で見えはするものの、東海はより詳細に見ることができ、Google Earthを使えば立体的に見ることもできる。これは村ではなく、原電で対策をする話かもしれないが、対策をしたほうが良いと思う。

- 川又：課題として預かり確認しておく。

■提案3（安全に避難できる避難ルートと避難計画の整備）

“案”をとり，正式に策定を

- 東海村広域避難計画を“案”ではなく，まず策定し，その後，訓練などをやって実現性を高めていってほしい。
- 東日本大震災からのかなりの時間が経過している。もし自分ごと化会議に参加しなければ，もう策定されているものだと思っていた。計画を最優先に決めてほしい。

避難訓練

- 避難訓練が実施されていることを知らなかった。もし知っていれば参加したかった。

伊藤：昨年と今年の避難訓練は中止となったのか。

川又：昨年度は、「新型コロナウイルス感染症」の影響もあり，中止した。今年度も残り3か月だが，できるような状況であれば，実施したいと考えている。なお，原子力災害に備えての訓練は，過去3回実施しており，参加者は，自治会と自主防災組織から募り，その他にも，公募で受け付け，多いときで250から300人ほどが参加した。公募の際にはマスコミに依頼し，事前に新聞などにも掲載しているが，まだまだ工夫しなければならない。

- 避難訓練の日を決めてから公募するのではなく，避難訓練希望者のリストを村でつくっておき，避難訓練があるときに希望者に連絡するという手段もある。また，周知には防災無線は使えないのか。

川又：検討する。なお，防災無線はそのとき村内にいる方にしか届かないため，防災無線で流した情報は，同じ内容をホームページとSNSでも発信するよう役場内で共通ルールを設けて情報発信に努めている。

- 原発事故，地震，津波など様々な災害が考えられるが，避難計画の前提は何なのか。

川又：東海村広域避難計画は，東海第二発電所での原子力災害を対象としている。東海第二が地震や津波などを受け，被害が拡大するという複合災害を想定したものではなく，まずは，事業所でトラブルが起きて拡大していくというケースを想定している

- 地震で広範囲に被害があった場合，避難先の方がさらに大きな被害を受ける可能性を考えると，避難先は1か所ではなく，分散しておかなければならない。まだ検討すべき点がある。

■提案4（東海村のいまの特徴や現状の魅力を知る・伝える）

若者へ東海村の魅力を伝える

- 以前の会議の中で他の参加者から「村の若い人が村外に出たら戻ってこない」という話が出ていた。人口流出対策のために実態を把握する必要があると思う。
- 完成した提案書をもとに、原発問題について、中高生の公開討論会を開けば、家庭でもそういう話をする機会も多くなると思う。

伊藤：自分ごと化会議 in 松江では、実行委員会にいた学生たちが、自分ごと化会議の提案書を使って、自分たちで新たな提案をしようという動きがある。

- 会議の内容が机上の空論にならないようにしてほしい。自分も、この場で発言するからには、責任があると思っているが、「誰が実現するのか」や、「達成できたか」を判断できる責任者を用意することが大事だと思う。

伊藤：この提案書は「自分ごと化会議」の参加者である皆さんが「行政」に提出するもの。実行する責任は提案書に書いてあるそれぞれの主体にある。実行する主体は「行政」の比重が大きいが、提案書の中に「私たち村民が行うこと」の項目があるように、住民にも責任がある。

- 1～MOのまつりの開催期間を2日間、3日間と連続でやるようにして、魅力とともに提案1・2についても関する内容を伝えられるようにできたらいいのでは。
- 魅力を伝えるにあたっては、ターゲットを明確にして発信する必要がある。今の子どもたちが一度村を出て行っても、大人になってまた東海村に戻ってくるよう、交流や思い出づくりも同時に行っていきたい。
- 交流の中で原発問題のことも伝えていけるといい。

転入者・転出者への魅力調査とフォロー

- 転出者と転入者の両方に、その理由を確認することが重要だ。転入する人の多くは「通勤に便利」、「就職先がある・近い」といった理由かと思うが、近隣の別自治体ではなく、あえて東海村を選んだ理由は何かを聞くことで、東海村の魅力がわかるのではないかな。
- 転入者は村のことをよく知らずに過ごしている方もいるのではないかな。転入手続きのときに村のPRパンフレットを渡せば、転入者が村のことを知るきっかけになる。
- 転入から1か月後や1年後など、しばらく経過してからフォローする。転入してきてどうか、困ることや違和感を覚えることはないかなど、生活しての実感を聞き取ることで、より東海村の特徴を知ることができる。

東海村の持つ原子力以外の魅力

- 村外から見ると「東海村=原子力」であり、その「原子力」というイメージのせいで、

干し芋など農産品への風評被害もあると思う。それを取り除くことが、今一番取り組むべき課題ではないかと思う。

- 農業以外にも魅力は色々ある。東海村となる前の石神村や村松村の頃から受け継がれてきているものを、昔から住んでいる方は継承して持っている。それを子どもたちに伝えていきたい。
- 村民が地域に根付き、大人も子どもも仲よくやっているというアピールができれば、安心・安全というイメージにもつながっていくと思う。

■提案5（原発に代わる新たな東海村の魅力を作り出す）

原発の稼働期間と財政シミュレーション

- 今、東海第二は60年経過まで、運転延長が認められていることを追記し、残された20年という期間を明記したい。
- 東海第二がさらに延長するのか、新しく建設するのか、いずれにしても財政的に窮地になる時期が必ず来る。そのために皆で準備していこうということを伝えたい。
- 「交付金がなくなった後の対応についての検討」について、実際にどれだけのお金を投じれば東海村を維持していけるのか、交付金がなくなったら、私たちの税金は、暮らしは、行政サービスはどう変化するのか。シミュレーションが必要だ。
- 財政シミュレーションはいい案だ。また、村の財政状況などを知るために、皆で議会を見に行く機会をつくるのも良いと思う。

伊藤：全国的に、自分ごと化会議への参加を機に、議会を見に行く方がいる。住民の皆さんがもっと関心を持ち、まずは見に行き、どういう議論がされているのかを知ることは大切で、提案1の「情報のギャップを埋める」にもつながる。

新たな魅力

- 新たな魅力をつくるよりも、今の東海村の魅力を再確認して、今ある強みをさらに伸ばした方が良いのかも知れない。

伊藤：提案4と5は、完全に切り離して考えることはできない。現状を知り、知った上で先のことを考えた結果が、「今ある特徴を使った産業にしていこう」ということになるかも知れない。

- 新たに工場を誘致するのか、新技術開発を進めるのか、または原子力関連を伸ばしていくのが良いのか。企業と地域と一緒に検討する委員会をつくって、5年先、10年先を見据えて考える必要がある。

- 東海村の今の特徴である原子力を今後も活かしていくのであれば、小型モジュール炉（以下、SMR）の誘致や、高レベル放射性廃棄物の最終処分場建設なども手だと思ふ。様々な見解があると思うので、まずはこれらについて発信する情報を増やして行ってほしい。
- 東海村は国内で率先して原子炉をつくったところでもあるのだから、SMRのような新しいものを取り入れて安全にするという流れがあってもいいのではと思う。
- 全国的に人口減少が進んでいて、どの自治体も魅力をつくり出すことに必死だ。ほかと差別化できる、賛否両論あるような施策でも、恐れずやってもらいたい。
例えば明石市では、離婚したシングルマザーのために、もとの配偶者から養育費を取ってくるというようなことをしている。それくらい特徴のあることをすれば、メディアにも取り上げられるし、それを見た誰かにとって「東海村の魅力」になると思う。
キャッチコピーのようなものにできれば、私たちが「東海村はこういうまちだ」と周囲に説明しやすい。

新産業の誘致・育成

- 東海第二の廃炉を見据え、新たな産業の誘致・育成が必要。
- しかし、むやみに誘致しようとすれば、それもまた財政破綻につながってしまう可能性があるため、慎重に進める必要がある。

■提案6（多様な人が参加する、建設的な議論を行う場をつくる）

参加のきっかけをつくる

- 村の広報紙で、勉強会や住民説明会をすると告知しても、意識の高い人しか集まらない。自分ごと化会議のように、きっかけになる気持ちを与え、「来てください」ではなく「一緒にやりませんか」という問いかけをすることで、人は動くのではないかと。
- それを継続して繰り返すことで、だんだんと村全体へ広がっていくのではないかと。
- 私は、今まで村から発信される情報を積極的に見る事がなかった。自分が変わるきっかけが何かあればいいと思いこの場に参加している。

伊藤：「意識が高くないとこの場に参加してはいけない」というわけではない。この会議に参加したことで、それぞれの立場の中で、何か関心を持って一歩踏み出せばいい。もともと意識が高い方は「議会に意見を言っていこう」、「役場の審議会に出よう」など、その行動が変化する方もいるかもしれない。全く関心を持っていない方が「広報紙を見るようになった」ということでも、十分、一歩踏み出していると言える。

建設的な議論ができる場

- この場のように、二項対立にならず、白も黒もつかないような冷静な議論の場になるよう配慮が必要だ。行政や第三者のコーディネーターが入り中立性を保ちながら議論の場をつくっていかないと、不毛の議論を繰り返す可能性がある。村が半分に割れてしまうようなことになれば、何のためにやっているのかわからなくなる。
- 「お互いが、東海村にいるかけがえのない仲間だ」という気持ちをつくり、そこから原発の話などに進んでいくようにできないかなと思う。

伊藤：今回のテーマは原発だけれども、これは「東海村の将来をどうしていくのか」ということと常にセットになる。子育てがテーマであったとしても、防災がテーマであったとしても同じことで、皆が共に考えていく必要がある。

場の運営について

- 自分ごと化会議はすばらしいと思う反面、会議を正しく運営するのは難しいことなのだと思う。以前の傍聴者アンケート結果を見ると「『金で解決、嫌なら出ていけ、原発の後から住んだ人が反対するのはおかしい』など、粗暴な発言が放置されるなど、とんでもない」という意見が書いてあった。表現の自由を確保し、論理的に返すのはいいが、周りから「発言を許さない」という声があったら、自分の意見を言いにくくなってしまいう人もいだろう。他人の表現を否定するのは絶対にあってはならない。

伊藤：アンケートについては、構想日本と村で相談し、原文を出すこととした。傍聴者からの意見を公開しないことで対立構造をつくりたくないという意図だ。参加者の皆さんが、どんな状況であっても自由に発言しやすく、安心できる空間をつくらなければいけないと私も思っている。

「考えているが結論が出ない人」と「あまり考えたことのない人」

- 議論の場に、「考えているが、結論が出ない人」を呼べればいいが、「あまり考えたことのない人」を呼ぶことは重要なのだろうか。例えば、「あまり考えたことのない人」に「原発が再稼働します」といっても、「原発が廃炉になります」といっても興味がないまま終わるのではないか。

伊藤：この提案は「『議論したものの、あまり考えなかった』という人が重要だ」という趣旨ではないと思う。この場に来てから考え始める方々もいる。始まったときは、「とりあえず当たったから」という理由で来た「あまり考えたことのない人たち」が、変化をしていくことも、色々な人たちが集まり議論する意義となる。

「賛成」「反対」の対立が白熱するのもいい

- センシティブな問題を話すときには、ある程度の対立は仕方ない。その対立の中からまた意見が出てきて、建設的な意見になったりする。
- 賛成の人は賛成、反対の人は反対で、もっと白熱した議論もいいと思う。全然興味がないという人は、最後まで興味がなくてもいい。そういう人もいないと議論にならない。
- 一度、前面に出ることに慣れている賛成・反対・中立の人を集めて議論していただくことで、それを見た方が、自分がどの側に近いのかを知ることができるのではないかと。またそれにより、より深い考えを持つことができるかも知れない。

■提案書全体に関わる意見

提案の実現可能性

- 内容はすばらしい。一方で実現の難しさがある。法治国家ゆえの制約や変化を嫌う国民性などによって、提案が机上の空論にならないか。どのように実現していくか、提案の実現可能性を精査して、本当に実現可能な部分はどこなのか見たい。

伊藤：提案書の中には、実現の途中で行政への働きかけが必要なことはあるが、法律を変えなければ取り組めないものはないと思う。この提案の中のどれか一つでも実現することで、実現への一步を踏み出せる。自分ごと化会議は今回で終わりだが、終わった後でも、どのように進めていくか、皆さんと一緒に考える場があるといい。

「責任」

- 「責任」についての発言があった。政治も行政も原子力問題も、最終的には国民一人ひとりに責任があることなのだと記載してはどうか。

提案書の全体構成

- 「6つの提案」の一覧を見て、何に対し、どんな目標に対する提案かわかりづらかった。「どういう東海村にしたいか」と考えての提案だという大きな方針が、6つの提案の一覧ページにほしい。
- 提案1から6の順番について、提案1を見たときに、インパクトがやや薄い。順番を入れかえてはどうか。
- 今日が終わった時点のコメントの数で入れ替えるのも良い。提案3に関するコメントが一番多く、次点で提案5と提案4、提案1と6、提案2の順にコメント数が少なくなっていく。提案3をトップに持ってきて、提案5を次に持ってくると、興味が湧いて読んでくれるのではないかと。提案1、2は当たり前すぎてインパクトに欠ける。
- 「東海村が大切だ」ということを念頭に置くと、提案4、5、6を先にして、「どんな

東海村にしていきたいのか」→「今、原発が40年経過した。これからの先を考えなくてはならない」→「原発の現状を知ろう」→「原発があるのだから、もちろん避難ルートも大切だ」という順番でまとめるといいと思う。

- 提案3は、他の提案に比べて具体的なものなので、一番最後に持ってきてもいいのではないか。

コーディネーターによる振り返り

- 提案1の「情報のギャップを埋める」ということについて、村は情報を出しているが、村民は見えていない。これは両面の問題であり、村はいかにわかりやすく、皆が見たいと思える情報を出せるか。また、住民にも見ようとする努力・関心が必要で、そのためには双方向のやりとりも重要となる。例えば、参加者が不利益を被らない環境を整えた上で、自分ごと化会議をオンラインで配信するなど。
また、オンラインの活用だけでなく、リアルで集まる場を増やしていくことが必要で、特に事業者と住民が集まれば、ギャップを埋めていけるのではないか。
- 「情報共有」では、抽象論になってしまいがちなので、具体論を何か書きたい。例えば、村内の子どもたちから、「どんな村にしたいか」という意見を書き出してもらった上で、大人が実現に向けた改善策を考えていく…というように具体論があれば、ギャップを埋めようとする関心が高まり、より実効性が高まるのではないか。
- 提案3の避難計画の話は、とても具体論として書かれている。ぜひ実現してほしい。提案書全体にも言えるが、「どう実現していくのか」ということが重要。
- 提案4と5はつながっていて、今の現状を知る、特徴を知ることと、将来的なことを今から考えておくという内容。東海村には、原発があるだけでなく、原子力関連施設が多い。その延長線上に、提案5のように、今後のことを考えていくことも必要だ。
- 交付金は、未来永劫もらい続けられるという保証はない。なくなる、または減った場合の財政的なシミュレーションをしておく必要がある。その上で、今の東海村の特徴を活かしていくのか、新しい産業の誘致・育成に力を入れるのかといったことを検討する。
- 提案6は、提案4・5をどうやって考えていくのかに関して書かれている。自分ごと化会議のように多様な人たちが集まる場を増やしていくことにより、提案4・5のことをさらに深掘りしていく。無作為抽出ではなくても集まれば議論できる。例えば、提案書をもとにして、学生が公開討論会をするなどすれば、より興味・関心が高まり、広がっていくことが期待できる。
- 提案6は、自分ごと化会議のような場をどうつくるか。自分ごと化会議は、賛成・反対を決めるための場ではなく、色々な人たちが集まり「自分ごと」にしていく場。その結果として、いずれどこかで自分なりに判断しなければいけないときが出てくるかもしれない。そのための準備をする、きっかけをつくるのがこの場なのだ。今回は約20人

の参加者がいる。これで村民全体が賛成・反対の判断のための準備ができたかというところ、そういうわけではない。なので、こういう場をもっとつくっていけないかという意見があった。

- 提案の順番について、ストーリーを考えると、関心を持ってもらい読み進めてもらうために、提案の順番を変更した方がよい。
- 6つの提案が急に出てくると、何に対しての提案かわかりにくいので、大きい方針をどこかに書いておくことはできないかという意見があった。皆さんからいただいた意見・感想をもとにして「はじめに」のところに、提案書全体の方針を記載する。
- 政治も行政も原子力問題も、最終的には国民一人ひとりに責任のあることだ。
- 全体を通して、提案を机上の空論にしないように工夫が必要で、どう実現するかということ行政だけではなく、参加者の皆さんとも一緒に考えていきたい。

■総括

OB・OG会（意見交換のグループ）について

伊藤：自分ごと化会議が終わってからも、LINEグループやメーリングリストをつくって、意見交換の場を用意しておくと思う。例えば、役所から何か提案があったり、意見を求められることもあるかもしれないし、このグループの中で、数か月後、今の状況がどうなっているか聞いてみようという話が出てくるかもしれない。他自治体の自分ごと化会議でも、終わった後に、OB・OG会と言われるものを、LINE上、ネット上でつくっているケースは多い。

参加したいという方がいれば、LINE IDもしくはメールアドレスを「意見提出シート」のどこか空いている部分に書いていただきたい。あくまで自主グループなので、強制ではない。やり方は相談しながら考えたい。

参加者から感想共有

- 自分ごと化会議に参加してうれしい。普通に暮らしていたら会わない方たちに出会い、意見を聞くことができたし、原発の見学にも行けた。
この会議に参加したことで、家族でも原発の話をする。話をする中で、息子は色々考えることがあったらしく、第2回が終わった後に、福島第一に見学に行った。そして福島の実状を見て、考えることがあったようで、原子力関連の力になりたいと考え、原子力関連の警備に転職することになった。
- 原子力関連施設を見る機会は少ないので、見学は有意義だったし、会議の中では普段聞けないような意見を聞き、自由に発言したりでき、参加してよかった。原子力に限らず、こういう話し合いの機会があるといいと思う。ありがとうございました。

- 十人十色の意見があると感じた。私は原子力関係に勤めていて、ほかの方がどのような考えを持っているのか、意見を聞いてみたいと思ったのが参加を決めた理由だ。ほかの地域では原子力大反対というところもあるかと思えば、地域との関係がよく、賛成の方が多い地域もある。そうして見ると、東海村は色々な意見があってよかった。今、自分がやっている仕事の中で、何が足りないのか、今後どういうところに気をつけるべきなのか、参加したことで少し見えた気がする。
- 他の人の意見を聞きながら、控え目ではあるが、自分の意見も少しだけ言わせていただいた。原発のことを話すということに不安ではあったが、ほかの参加者に似た意見の方がいて、心強いと思った。参加できてよかった。
- 私は、原子力関係の仕事をしていて、反対派の集会へ行ったり、賛成派の集会へ行ったりしている。反対派の集会へ行くと、それが世の中の意見の全てなのかなという気分になるし、賛成派の集会へいけば、それもまた同じくそういう気分になる。この会議に参加した理由は、「普通の人はどう考えているのか」を知りたかったから。全5回、皆さんの意見を聞き、「ここは賛成、でもここは反対」という意見もあった。少し安心したというか、極端な意見に流されずに一生懸命考えるのが大事なのだということを、この会議を通じてわかることができた。これが一番の収穫だった。
- 参加できて本当によかった。自分の意見や考えが及ばず、発言する機会が少なかったという反省点はあるが、原子力関係に勤めている方の話を聞くこともできたし、ほかの村民はどう思っているのかということが聞けて、大変有意義な時間を過ごせた。今までは村のことに無関心だった部分も多いので、これからは広報紙を読んだりするなど、自分から情報を得ていきたいと思う。
- 私は最初から、原発問題に対して自分の意見を持っている。この会議に出たからといって、それが揺らぐことはなかった。ただ、色々な意見を聞いて、自分の中に取り入れて、改善していこうと思うことがあった。抽選に当たり、たまたま受け取って興味を持ち、何となく書いた1通のアンケートから、ここまでたどり着いたという結果だけで、生活自体はあまり変わらないと思うが、それでもこの会議に参加できて感謝している。
- 参加したのは、皆は原子力について、本音でどう考えているのだろうということに興味があったから。葉書をいただいたときに想像したものとは全く違い、これからどうなるのだろうと不安な気持ちで参加していたが、色々な意見を聞いてよかった。皆さん、冷静に、非常によく考えていて、色々な意見があるのだというのを知ることができ非常によかった。
- この会議に参加でき本当によかった。自分から手を挙げて参加するとなると尻込みしてしまうが、無作為抽出で選んでいただいたことで一步踏み出せた。参加して得られたのは、皆さんの意見を聞いて「ああ、こういう意見もあるのだな」と、すごく勉強になったこと。参加するようになって、原発のことが目に止めるようになったし、成長できたと思う。自分ごと化会議のように、無作為抽出で参加者を選ぶことを、これからも続

けていただけるといいなと思っている。

- 普段はなかなか見ることができない東海発電所と東海第二発電所、そして福島第一原子力発電所の見学が非常に印象に残っている。東海第二では防潮堤の建設現場、福島第一ではALPS処理水の現物を見ることができて、非常によかった。また、会議の参加者は皆、「東海村をよりよくしたい」という意気込みがあるように感じられた。またこのようなチャンスがあれば参加したい。
- この場を設けてくれた行政の方に、深く感謝している。中々できないような経験をさせてもらって、東海と福島の発電所見学も、自分にとって本当に価値のある経験をさせてもらったと思っている。この会議が未来にどうつながっていくのか興味があるし、非常に楽しみだ。行政のただのパフォーマンスで終わらないことを本当に願っている。
- 参加してよかった。こうして村民の声を集めることはこれまで中々なかったと思うので、今回、村民の声として提案書をまとめたことは大きな成果だと思う。原発を通して、今後、東海村をどのようにしていきたいかということを考えるようになった。本当に自分ごと化になったと思っている。
- この場を設けていただいた行政に本当に感謝している。毎回全部出席して、最初からやり直したいぐらい、本当に充実した内容だった。こんなに自分自身の意見を言うのも学生以来だ。自分ごと化して考えることができたと思う。これを機に、地域に戻って、色々な人に話をしていきたいと思っている。強制することでもないから、興味がない人は、別に興味がなくてもいい。自分は知った以上、これからどうなるか見ていきたい。中には、自分はあえて見ないで生活していきたいという人だっていると思う。そういう人たちに強制することもない。自分の中では、今回の自分ごと化会議に出席して、皆さんから聞いた意見を、今後活かしていきたいと思っている。
- 今まであまり考えることがなかった、自分が住んでいる「東海村」というまちに、より関心を持つことができて本当によかった。新型コロナウイルスのおかげで、少し時間が足りなかった気がする。的外れな意見も言っていると思うが、それが本当の住民の声であり、それを行政の人に冷静に聞いてもらうという場は、とてもよかった。今後もこのようなことを続けてもらいたい。
- 本当に参加してよかった。無作為で当たったという案内が来て、文化センターでの全体説明に行くまでは、「原発のことを話すのだったら、再稼働するかしないか」だと思っていた。再稼働に賛成・反対ではない、「話す」ということに、そんなに意味はないだろうと正直思っていた。
しかし、伊藤氏から「結論を出すものではない」とあり、「結論を出さない会議とは何だ?」と思った。最終的に考えるのは自分で、自分ごと化していくには関心が必要で、関心を持つようにするにはどうしたらいいのかなと考えるようになった。そうしたら自分の中では、「郷土愛が欲しい」と思った。その郷土愛を育てていくにはどうしたらいいのかというと、最終的には、色々なことに参加することかなと考えが至った。

これからも東海村の行政のことなど、ぜひ案内してもらいたいし、率先して参加し、少しでも自分が役に立てることがあるのであれば貢献したい。参加できて本当によかった。

コーディネーターとオブザーバーからの協議総括

伊藤：今日この場に、第1回で、「自分ごと化会議 in 松江」の紹介をした福嶋氏に来ていただいている。最後に一言いただきたい。

福嶋：皆さん、本当にお疲れさまでした。東海村と松江市の共通点は多いものの、松江市は「市民の実行委員会が主催」という違いがある。また、同じ原発立地の自治体でも、松江市の無作為抽出された参加者21人の中には、原子力関係の仕事をしている方が一人もいなかった。逆に、脱原発で活動している方も一人もいなかった。「原発は必要だ」という人、「ないほうがいい」という人はもちろんいたが、一番多いのは中間だった。中間というのは100人いれば100人の立場があるが、中間の人たちが両方の専門家の話を聞きながら議論したのだ。東海村は原子力関係の仕事についている方がいるという違いはあるが、議論の中では、徹底して無作為抽出で選ばれた一人の村民として話をしておられ見事だった。

松江市では、傍聴者が毎回60から80人ほどいて、脱原発の活動をしている方、電力関係の仕事をしている方などたくさんの方が傍聴に来られた。中には、某電力会社の元トップだった方がわざわざ見に来られたこともあった。

今日の会議の中で、傍聴者の方からの意見に関する議論が少しあった。松江市の自分ごと化会議では、参加者はもちろん、傍聴者から良い評価をもらっている。松江市での傍聴者の声を一部紹介する。

- ・「色々な意見の人が安心して話せる場づくりがとても大切だとわかった」
- ・「こんな場が現実に可能だというのは、すごく民主主義の可能性を感じた」
- ・「傍聴者なのだけれども、自分自身も会議に参加したような気持ちになって、自分のこととして考えました」
- ・「自由な発想のもとに、何でもありの会議はすばらしいです。誰が正しいかではなく、どうしたら幸せと感じる生活ができるかを考えるのは、まさに私自身の望むことです」
- ・「多様な立場の人の意見が出た。声を出していないだけで、考えていることは皆たくさんあるということが可視化できたのがとてもよかった」

松江市で傍聴者が評価したものと同じものが、東海村にもあったと思う。

松江市では市民が主催したが、東海村は行政が主催した。行政が主催すると、どうしても住民の方は、「ここが問題ではないか」とか、「ここがまだ足りない」といった問題指摘モードで見る傾向がある。もちろん、行政に対して、おかしいところは徹底して批判するのはとても大事だが、いいことをしているときに応援することも必要だ。

松江市の自分ごと化会議も、実現していくために行動しようという動き、色々な派生的な動きも出ている。傍聴した隣のまちの人は「市民がこんなに議論しているのに、議会はどんな議論しているのだろう」といって、自分の市に帰って、議員を呼び、議会を知る会を開くなど、自分ごと化会議から色々なことが生まれている。

松江市の提案書の「はじめに」の部分の最後は、「皆が自分ごと化をしていくために、自分たちはこれからも何かをしたい。その動きが松江から日本中に広がれば、次の、さらにその次の世代にきっと感謝してもらえと思う」という言葉で結んでいる。

松江市から、さらに中身を深めて東海村に広がった。さらにまた色々なところに広がるように、私たちと、東海村の参加者や関係者の皆さんと一緒に、また何か取り組みができたらうれしい。そうすれば、次の世代、その次の世代に感謝されると思う。これからもぜひよろしくお願いします。

伊藤：ありがとうございました。全5回、コーディネーターを務めさせていただく中で、原発という難しいテーマを、皆さんがいかに関心を持って議論していけるかということが、会議を進める上での私のテーマだった。

議論のテーマはほかの自治体と異なっているけど、自分ごと化会議の中の雰囲気は東海村でも松江市でも、福嶋氏が言ったように、多分どこでも同じなのだと思う。

「提案書をつくって終わり」ではなく、参加した方々が引き続き意見交換したり、提案の実現に向かって動いていくグループをつくっていきたいと思っている。

ご参加いただいたこと、スタッフ一同含め、本当に感謝しています。皆さん、ありがとうございました。

■全体総括

構想日本 加藤代表より総括

加藤：東海村自分ごと化会議を始めて丸1年になります。構想日本は今まで、このような会議を全国で160回ほど、様々なテーマでやっていますが、丸1年をかけたのは初めてです。コロナで何回か延期になったこともありますが、その間に、原発や福島第一の見学もでき、皆さんにじっくり考えていただく時間があつたことはよかったと思っています。

福島第一に行く途中の道では、ガラスが割れたまま、車もそこにあるままなど、10年間、時間が止まったような光景を皆さんが目撃し、原発をより自分ごとと感じたというお話を伺いました。今回の会議が目指すのは、目の前のことに何か結論を出すということではなく、皆さんに原発のこと、原子力のことを、さらに自分ごとにしていただくということに尽きます。

今日の会議の中で、「まどろっこしい」という意見がありました。今まで、傍聴者の方

からも、そういう意見がありました。机上の空論だという意見もありました。しかし、むなしかったり、机上の空論ではないかといらいらしているということ自体、自分ごとにしていただいていることのあらわれだと私は思います。多くの自治体で「自分ごと化会議」を開催してきましたが、最後に、むなしかったりということをあんなに一生懸命言う人はいませんでした。それはもっと議論をしたい、提案を実現したいということですから、私はとてもありがたく思っています。

原発問題でも、ごみ問題でも同じですが、その恩恵を受けている東京などの人は、原発を他人ごとになり、向こうにある問題と位置付けています。こうした問題を「自分ごと化する」ということは、恩恵を受けている人たちが「健全な加害者意識を持つ」ということではないのかなと思うのです。ごみを出している人が、ごみの処分場のことを自分ごととして考える。電気を使っている人が原発の事故のことも自分ごととして考え、何千万分の1かの加害者という意識を持つ。温暖化も同じで、例えばペットボトルの飲み物を飲む。そのペットボトルを作るために電気を使い、CO₂も出している。便利なものから利益を受けている私たちみんなが、何億分の1かの加害者ということになります。そういう、いい意味での、加害者意識があれば、次のステップに進めるのではないのでしょうか。

6つある提案の順番を変えたいという意見がありました。そういう考え方もいいなと思います。提案1から3は、従来型の原発問題、提案4から6は、今後どうしていこうかと将来に向けてのことが書いてある。東海村には、原発だけでなく、色々な原子力関係機関があるから出てくる意見だと思います。

もっと激しく、白熱した議論を、という意見についても、いいと思います。相手の話を聞かずに非難するのは良くないですが、みんな考えが違うのは当たり前のことです。白熱した議論になるのは「自分ごと度」が高いことの表れですから。村主催じゃなくても、松江市と同じように住民が主催し、村が費用を補助するというようなやり方も含めて考えていただければ、さらに良い議論ができるのではないのでしょうか。

構想日本が協力して、無作為抽出で選ばれた方に議論していただく会に参加した方は全部で1万人を超えています。皆さんの仲間が全国に1万人いるということです。そのうちの多くの方が、それぞれの場所で色々な活動を始めています。自分ごと化会議そういった、他のまちの「自分ごと化会議」OBの人たちとの横のつながり、意見交換も有益です。そのための協力もしたいと思います。

最後にひとつ、あるお話をご紹介します。

年末になると、よく「高橋書店」という本屋の宣伝があります。この高橋書店が、民間のいい言葉、ちょっとしたことわざみたいなことを募集しています。その選考委員の一人から聞いた、ある年配の女性から応募された話です。

子どもが学校で掃除する。掃いて、雑巾で拭く。拭いた雑巾をバケツで洗うと、バケツの水がすぐ汚く、まっ黒になる。小学生なので、バケツの水は

重いし、冬なら冷たい、行く途中でこぼれることもある。だからみんな「汚いな」と思いつながら、誰もかえない。「誰かかえてくれないかな」と思っている。

その時に先生が、黒板に「誰かとは自分のこと」と書いたのです。その当時、小学生だったその人は、年齢を重ねてずっと、その言葉が常に頭にあった。誰かほかの人がやってくれるほうがありがたい。面倒くさい。手間がかかる。自分も忙しい。でも、彼女は事あるごとにそれを思い出し、「誰かとは自分のこと」と思ってやってきた。彼女は、その結果、とても豊かでない人生を送れたと振り返っているのです。

「誰かとは自分のこと」。私はこれに尽きるのではないかと思います。

東海村 山田村長より総括

山田村長：全5回、視察も含めると全7回。お忙しい中、参加していただきありがとうございました。

最後に皆さんから、「参加してよかった」と言ってもらえたことで、私もほっとした。改めて感謝申し上げたい。構想日本の加藤氏、伊藤氏にもしっかり仕切っていただき、本当に有意義な会議ができたなと思っている。

今日の提案書は、行政のところはどこも分量が結構多く、プレッシャーを感じているが、貴重な提案なので、ここは村の内部できちんと整理させていただく。

提案書の「私たち村民」と「地域」の部分は、行政が押しつけるわけにはいかないの、どうするか進め方についてはまた考えていきつつ、この提案を無駄にすることはなくよう活かしていきたい。

自分ごと化会議からどのような結果が出るかわからない中で、議会から「終わったその後はどうするのだ」と聞かれたが、「提案書を見てから考える」ということで何も決まっていなかった。今日、本当にいいご提案をいただいたので、しっかりやっていく。

提案6にあった「自分ごと化会議のような議論の場」は、対話の場だと思っている。ディベートではなくて、お互い話し合う、意見を言い合える、相手の意見を否定しない、感情的にならないことで対話が成り立つ。原発以外にも対話できる色々なテーマがあると思う。

皆さんが生活していて、何も問題がなければ、役場に何かをお願いすることはなく、役場の情報はそれほど必要ないが、福祉面や環境面で何か問題が起きると、「役場は何をしてくれるのだろうか」と考えが至り、そこで初めて役場の情報に気が付くのが普通だと思う。関心を持ってもらうというのはなかなか難しいことだが、今回、無作為で選ばれた皆さんと、こういう場を設けることができた。村としては、このようにきっかけをつくるのが大事だと思っている。情報発信の仕方を含め、さらに検討していきたい。

提案をしっかり受け止め、皆さん方の議論が無駄にならないよう、村長としてしっかりやっていくので安心してほしい。本当にありがとうございました。

■事務連絡

提案書とアンケートに関する事務連絡

菊地：(東海村 防災原子力安全課主事)

提案書は、本日、皆様から出た意見、記入いただいた「意見提出シート」をもとに、構想日本で改めて整理させていただく。終わり次第、参加者に郵送するので、内容をご確認いただきたい。完成後の提案書については、改めて参加者の皆様にお送りしつつ、村長宛てに提出する機会を設ける。

本日の会議の内容・様子等については、WEB配信等なさないよう、秩序ある行動にご配慮ください。

山路：(東海村 防災原子力安全課 係長)

昨年12月の第1回会議から1年間にわたり、会議や施設見学への参加、そして円滑な会議運営にご協力いただいたこと、改めて感謝申し上げます。

以上で、東海村自分ごと化会議を閉会します。